多屋委員提出資料

新型コロナワクチン接種後に発症した心筋炎関連事象の臨床経過についての知見

○　これまでの海外の報告によると、若年男性の２回目接種後に発生頻度が高いとされる。
○　同報告によれば、心筋炎関連事象の臨床経過については、多くが軽症である。

出典　　**内容の概要**

Mevorach et al (New Eng J Med, 2021)

- イスラエル国民の16歳以上、約500万人がファイザー社ワクチンを2回接種した時点での後方視的研究において、136件のブライトン分類Level1または2の心筋炎が探知された。
- ワクチン導入前と比較した、ワクチン接種後の心筋炎発生比率は、2回目接種後の16-19歳の男性で最も高かった(13.60; 95% CI, 9.30 to 19.20)。
- 136件中129人（95%）が軽症と判断された。

臨床症状	検査所見	転帰
胸痛（95%)、発熱(46.7%)、呼吸困難(12.5%)	トロポニンI/T上昇（100%)、CRP上昇（86.7%)、ECG変化（69%)、心エコーにおける心拍出量は4人を除いて正常から軽度減少、48人に施行したcMRIでは軽度～中等度の後期ガドリニウム増強	129人は軽快。平均入院期間3-4日。ほとんどの患者が非ステロイド系抗炎症薬で治療。

Bozkurt et al (Circulation, 2021)

- 米国心臓学会雑誌掲載の新型コロナワクチン接種後心筋炎関連事象に関する総説。
- 12の論文、症例報告からの61の報告例のまとめによると、全て入院例、98%が男性、平均年齢は26歳、1例以外はmRNAワクチン接種後、89%が2回目接種後発症、接種後平均2.4日後発症、100％が胸痛あり、入院期間平均は4.6日、89%が軽快（Montgomery et al, JAMA Cardiology, 2021の報告時点では、23人中7人が胸部不快感を訴えフォロー継続とされている）。

▶ 今後も注意深く情報収集を継続し、症状を認めた被接種者については、適切な医療に繋げていく必要がある。